

THE KANSAI UNIVERSITY BULLETIN

Osaka, August 30th, 1958, No. 318.

關西大學學報

昭和33年8月 第318号

昭和二十六年十月十五日第三種郵便物認可
昭和三十三年八月三十日発行(毎月一回三十日発行)
通卷三一八号



槍ヶ岳の遠望(標ヶ岳に於て、赤外線写真)

關西大學出版部

大学の傳統とその展相

矢野文雄
常務監事

我が関西大学の創立に當つて、明治十九年十月十三日附朝日新聞紙上、「関西法律学校の設立」を述べた記事の中に、「汎く内外の法律及経済学を教授する一大専修学校を開き、追々関西の各地にも支校を置き、法学を修めんとする者の便を開かるゝ計画ありて……云々」（「関西大学七十年小史」六頁参照）と報じている。これは単に新聞記者の修飾ではなく、おそらく創立関係者達の齊しく抱いていた理想であつたに違いない。関東は慶応、早稲田に附託しても、関西に於ける学問はすべて本学に朝集すべきことを希い、東都の学校に対抗して関西に位置する日本の代表学校たるの概を示したのである。さればこそ「関西」と云う名称を附したのである。こゝに創立者達の高邁なる理想がうかがわれ、これを伝統として我が関西大学は年と共に発展して来たのである。

最近ある書（「法学部物語」一粒社発行）の中で我が大学に関して、「兆す新しい学風」と云う見出しで批判しているが、創立以来七十数年後の今日になつてやつと新しい学風が兆しているのだろうか。この批判に對して我々は辟易することもなく、さりとて黙殺することもなく、唯われわれは自らに、まず我が大学の正門から象牙の塔に至る迄大学精神が創立以来弥漫高揚され、受けられて来たであらうか、この大学独自の学風はないのだろうか、等と問わなければならない。現在我が大学について学内外から色々と批判を浴びていることを考えあわせると、端的に云つて、現在反省期に入つていると云つても過言ではない。創立七十周年の式典が昭和三十年十一月四日華々しく而も盛大に挙行されたが、一方はたして歴史にふさわしき業績の集約とそれに基き将来へ新しく飛躍すべき大きな基盤がコンクリートされただらうか。この記念の年こそ大学に一時代を区分し將來を起す転換点であつたと思う。かゝる時なればこそ私は大学の自己測定—全体的にも部分的にも—をなすべきことを嘗つて唱へたのであつた。（拙稿「大学を測定する」関西大学々報第二八九号参照）

創立者達の高邁なる理想がこの大学の大学政策、教育政策、財政計画の中に生かされつつ今日に及んだであらうか。過去及現在に於て社会へ寄与すると云う一大使命を担つている大学が、地域社会の知性の向上、或は経済的知的風土の形成に積極的に活動したのであらうか、大学は社会と遊離してゐたのではないだらうか、大学文化と社会文化を充分に交流させて来たであらうか、長い歴史の間に大学としての必要欠くべからざる要件の具備に懸命なる努力をしつゞけて来たであらうか。我々は素直に我が大学の歴史的伝統的發展の跡を顧み反省すべきだと考えられる。これ等の問題を提起して私なりに思いを廻らしてみるに、理事者、教職員、財界人、校友、父兄等の中から、真に教育に理解と熱意のある有力者を以て組織する大学發展委員会の如きものが今日迄作られなかつた事が私立大学としての發展の度合を少なからしめ、今日指摘されている財政上、教育上の弱さを作つたのではなからうか。この事はひとり我が関西大学に限らず日本の私立大学共通の悩みではあるまいか。惟うに日本の教育、文化の底が外国に比して浅いことも、教育に対する理解の低さから来るものであり、また「よき教育には金がかゝる」と云う事も、認識が出来ても、財政上の弱さから容易なる展開が出来ぬ為水準を高く引き上げられずに遅々として低迷しているのだと思う。大学政策樹立については特にこの点に留意すべきである。より良き教育成果をあげる為の教育費の分析も充分でなかつたし、学生よりの収入のみに依存して経営をつゞけている事も私学経営の困難さを作つていたのである。又常にプログラム分析を行わずに来たことも方策決定に色々のミスをしたとも思われる。この点については我々にも大きな責任のあることを痛感している。

最近長期財政計画委員会が発足して将来の我が大学の發展を検討、企画することは喜ばしい。その基本的問題として教育的な面、及財政的な面を現在より将来に向つて、どの方向へ進展展開さすべきかを理論的にも實際的にも、追求して創立者達が意図し念願した一流綜合大学への足がかりを作る為の適正妥當なる方策を打ち出すべく活動されるであらう。この委員会に於ても特に考慮すべきことは我が関西大学の伝統がどこに生かされているのか、將來の展開の為に現在の構成員は如何にあるべきか、又現状はどうであるか、即ち理事者、教職員、学生、校友、その他外部の協力団体の活

動状況を正確に把握検討すべきである。特に産業都市大阪を中心とする地域社会が何をこの大学に要望しているのか、それに対して現在の規模が適正なのか、又現有せるこの大学の力に於て整備拡充する限界点はどこにあるのか、等を正しく判断して関西大学独自の「よき教育」をなす為の財政的基盤は如何にすれば確立し得るのかを考え、又大学の評価を高める手段でもあり、その使命の一つとして経営者再教育、弁護士、行政官等の再教育の場を持つこと、或は大学開放の努力、一方高等学校よりの進学者の為のカレッジデーの設定等はなせ行われぬのであろうか、一方学内的には学問は勿論のこと人間形成の為の施策、指導が充分に行われているのであろうか、等の諸問題が大学の長期計画に集約されて、強く打出されることを望んでやまない。

校友は輝しき伝統が常に保たれ、高度の技術と学問を、大学人としての誇をもつた而も閑大独自の品格をもつた大学生がそだてられ社会へ送り出されることを望んでいる。

この時代を私は敢て閑大中興時代だと考えている。この中興の祖となるのは誰か、それは現在の関西大学の関係者総てである。その立場立場に於ける責任の自覚、大学興隆の為におしみなくする努力の結果が一切を解決すると思う。私は過去色々の機会に大学の測定を叫んで来たのもこの点について強調したのである。されば、スランプの状態から脱皮しようとする凡ゆる努力が払われて、我が大学へ進まんとする層の厚さ、一般大学人口と入学人口との関係等経営上の重点的問題の検討と受入態勢の整備が行われている現在、ここで望まれている事は、大学経営特に財政計画と教務面よりする方針との検討より生れ出た一大大学政

策の大綱が大胆に打ち出される事である。創立より現在に至る迄その時々々の責任者の大学経営上の見識は打ち出されて来たであらうけれども、今日程明確な而も抜本的施策が樹立されることを熱望されている時代は少なかつたと思う。常に伝統の基盤の上に立つて適切明快なる大学政策の一大スローガンを打ち出されることを切に望んでいる。

× × ×

以上の如く我が関西大学の弱き面を自らも反省しながら指摘したのであるが、これは我が大学が重大転機に立つていゝことを痛感するが為である。ただこの時代にある我々は批判をするのみが能ではない。過去七十有余年の間に多様な困難に激突しながらも、今日の関西大学に迄飛躍させた先輩の労苦に対してはあくまで謙虚な気持で最大の敬意と謝意を捧げ、それに報ゆるべき決意と実行をなすべき責任のあることを再認識すべきであると共に、教育事業は将来を作つて行くべきもの、過去の伝統を掘り下げ、将来への展相を計り、大学を強引に発展さすべき努力をすることを自覚すべきである。されば、責任者は右顧左へんすることなく、但し鞭撻の意味の批判助言はフランクになつて受け入れ、我々は常に「大学」と云う大きな立場を忘れることなく考え、そのポストに懸命な努力をしなければならぬ。大学の発展は総て伝統の中から生れ出るべきもので、我々が今日の現状に何か虚なものを感じるにすれば、大学の伝統、さらに大学の使命に培うことを忽にしてはなかるか。特にこの大学に現在必要なものは内部反省は勿論であるが、社会的に展開するための大学周辺の衛星的存在たる外廓団体の全幅的な協力を得る為の早急なる施策を打ちたてて、内外相呼応して経営上、教育上一切の合理化を

行することである。

重ねて云う。現在こそ我が関西大学中興時代である、と。創立以来既に七十年の一世代を送つて、新しい次の世代に入つた今日、この大学の輝しき発展を作り出し、社会、国家、人類へ大いなる貢献をなし得る秀れたる而も誇ある将来へと再出発することを願つてやまない。

「大学の伝統」と「その展相」との中間点に、現在のわれわれが今何をなすべきかを読み取らねばならぬ、と私は思う。

=====

ヘーグ法学者国際委員会から

図書資料寄贈

本学では、ヘーグの法学者国際委員会(International Commission of Jurists, The Hague)とは、學術交流、図書交換を行っているが、この程左記図書資料を寄贈して来た。

Justice in Hungary Today, Third Report of The International Commission of Jurists on The Hungarian Situation and the Rule of Law September 1, 1957-January 31, 1958 February 1958. (both duplicated and printed materials, the latter involving additional articles to the former). Newsletter of The International Commission of Jurists (The International Commission of Jurists), 1957-1958, Restropect and Prospect, No. 3, January 1958. Journal of The International Commission of Jurists, Vol. I, No. 2, 1958.

学 内 報

昭和三十三年度

私立大学研究設備助成補助金

交付内定

「私立大学の研究設備に対する国家の補助に関する法律」(昭和三十三年三月三十日公布法律第十八号)に基く文部省の研究補助金は、本年度本学には左記研究設備充実のため、交付されることに内定した。

- Kant-Studien (一一四冊) (文学部)
- 西蔵大蔵経 (八四冊) ()
- Bibliothèque eizvitrenne (一三七冊) ()
- Zeitschrift der Savigny-Stiftung für Rechtsgeschichte (一五四冊) (法学部)
- Record Publication (四一六冊) (大学院)
- Accounting Review (一一二冊) (商学部)
- Survey of Current Business (二〇冊) ()
- International Labour Review (七五冊) ()
- Zeitschrift für Nationalökonomie (一四冊) (法学部)
- Finanz-Archiv (四八冊) (経済学部)
- フリーデン電機計算機 (一合) (商学部)
- STW110型 (一合) (商学部)
- 低速度型ポータブルアナログ計算機 (一式) (工学部)
- 柳本ガスクロマト (一式) ()
- Beisteig. Handbuch der organischen Chemie (八八冊) ()

昭和三十三年度 私立大学理科特別助成補助金 交付内定

「私立大学理科特別助成補助金取扱要領」(昭和三十三年六月一八日文部大臣決裁)に基き、文部省より本年度本学に左記補助金を交付されることに内定した。なお金高は本学が私大中第一位である。

補助金総額 二六、九〇〇千円

内 訳

- 機械工学科 七、五三三千円
- 電気工学科 六、八四一
- 化学工学科 五、四七五
- 金属工学科 七、〇三二

なお、本補助金は私立大学の理科系学部の充実発展のため、学生の実験実習用設備を充実するに必要な経費の一部を補助して、わが国科学技術および産業経済の発展に寄与するを目的としている。

昭和三十三年度 文部省科学研究費交付

昭和三十三年度文部省科学研究費交付金(各個研究は、審査の結果、本学では飯田(文学部)教授、荒井(経済学部)助教とが受領することに決つた。

大阪俳諧史の研究 教授 飯田 正一
イギリスにおける市の発達について 助教 荒井 政治

教育職員免許法認定講習会

本学では、毎年夏期休暇を利用して、文部大臣認可による教職員免許法認定講習会を行っているが、本年も七月一日

(火)より八月八日(金)迄天六学舎で約六週間開講される。なお、開講科目と担任講師は左記の通りである。

種別	科 目	単 位	担 任 者
教職に關する	教 育 原 理	4	鈴木祥藏(教授)・本庄良邦(助教授)
	教 科 教 育 法	4	寛田知義(助教授)・西村亮一(学大助教授)
	教 育 心 理 学 (発達・青年を含む)	4	川口勇明(教授)・辻岡美延(助教授) 前田嘉明(学大助教授)・蜂屋慶(市大助教授)
教科に關する	日 本 史 概 説	2	横田健一(教授)・有阪隆道(助教授)
	人 文 地 理 学 概 説 (地誌を含む)	2	宇田米夫(専任講師)
育科に關する	哲 学 概 論	4	大島真二(教授)・田中 熙(教授) 小本是(教授)
	日 本 国 憲 法	2	中谷敬寿(教授)

教務事務研究会開催

私学研修福祉会主催の第二回教務事務研究会は、本年度は本学で行われことになり、去る七月二十八日(月)より八月一日(金)まで五日間本学千里山学舎を主に、比叡山とで開催。

各大学から教務関係者多数(来学からは十五名参加)参集し、多方面の問題を研究審議し、成果を収めて閉会した。

学 会 出 張

- ◇工学部片山佐一助教授は五月二日から八日まで九州大学における電気四学会連合大会に出席。
- ◇工学部田中行雄助教授は五月十四日から十七日まで広島大学における精機学会臨時大会に出席。
- ◇商学部植野郁太教授、富山忠三、河合信雄、清水宗一、末政芳信、亀井利明各専任講師、山上達人助手は、五月二十一日から二十四日まで一ツ橋大学における日本会計研究学会第十七回大会に出席。
- ◇商学部来住哲二専任講師は五月二十二日から二十五日まで北九州大学における日本商業英語学会に出席。
- ◇商学部今西庄次郎教授、寺尾晃洋専任講師、経済学部松原藤由教授、越後和典助教授、守谷基明助手は五月二十二日から二十六日まで明治大学における日本経済政策学会に出席。
- ◇文学部上道直夫、高尾国男、福本喜之助教授、丸山三友、脇坂豊両専任講師、上村弘雄助手は五月二十三日から二十七日まで学習院大学及び明治大学における日本独文学会に出席。
- ◇商学部安田信一教授、経済学部中川庸太郎、森川太郎助教授、高木具、鶴嶋雪嶺両専任講師上田昭三助手は五月二十四日から二十七日まで慶応大学における金融学会に出席。

賀屋先生の思い出

来住

哲 二

商学部専任講師



先生の急逝を聞いて呆然としたものは私のみではあるまい。昨年に較べて少し御弱りになつてゐるということを感じておられた方もあろうが、このような急死を遂げられようとは誰しも想像しなかつたであらう。今、先生を失ふことは私個人は勿論のこと、学界においても非常な損失である。先生は数少い貿易業務の研究者の中でも、その中心的地位を占めておられるメンバーのひとりであり、特にその法学的研究において新生面をひらかれ、後進者のためによき指導を示されたのである。而して学会の年次大会において、にこやかな風貌の下に発表される姿は堂々たるもので、その論旨は整然とし

紙切れの資料までも等閑にされず、今尚秩序整然と保存されている。私が先生にお目にかゝつたのは昭和二十二年商品学の講義の時であり、非常に濃厚な感じを受けた。併し驚いたことは何処からあのような元氣浚刺とした若い声が出るのかということであつた。このことは十数年経つた今日でさえも変わらず先生の講義を陰で聞くとき別人ではな

かという錯覚に陥入ることが度々あつた。このことを不思議に思つたのは私だけではないらしく、「声量の勉強をさせたのですか」と問われたこともあつた。昭和二十九年、再び先生の御指導を受

けることになつた。終始変わらず、にこやかに分らぬ所を手にとるように教えて頂き、私の若い反撥心がその程度で分りま

すというほど懇切丁寧であつた。このことはゼミナールや講義においてもあらわれ、また先生の蘊蓄の深さは学生をして有意義な且つ興味のある思い出を心に留めしめてゐることであらう。

先生は非常に学生を可愛いがられ、人格者として扱われた。「人を侮らず、各自の長所を生かさせるようにしなさい」ということを常に言つておられ、この意味は人を馬鹿扱いすれば、その個人は奮起するよりも寧ろ意欲を減退させるものであるから、自信を持たすようにして勉強させなさいということであり、学生に対する私の態度に注意を与えられたものである。

このように、先生は研究と学生指導のために渾身の努力を傾けられた。「惜しむらくはもう十年若かりせば、もつと頑張れるのに」と私に慨嘆された言葉は私の胸に焼き付き、慈父の如く私に教えられた数々のことを思い出すとき、私の責任の重大さを感じると同時に、御期待に添うべく努力することこそ先生の恩義に報ゆるものはないと信ずるものである。「自信を以て勉強しなさい」とおっしゃりながら、ひよつこりとそこから出ていらつしやるような気がしてならない。

元教授

賀屋俊雄氏逝去

元本学商学部教授賀屋俊雄氏は、病氣加療中のところ、薬石効なく、去る七月九日逝去された。

氏は大正三年東京帝国大学法科大学商業学科卒業、同四年久原鉱業及同商事株式会社に入り、イギリス及びフランスに留学、昭和三年本学大学部、専門部及び予科に勤務し、同十四年退職同十七年より同二十一年まで社団法人海外鉱業協会主事として仏領印度支那駐在、同二十三年本学教授として経済学部勤務し、次いで商学部勤務、翌二十四年商学部長に任ぜられる等の経歴を経て去る本年三月三十一日をもつて停年退職した。

氏は昭和三年本学に勤務して以来、中間七ヶ年を除いて通算二十三年間本学に教鞭をとり、温厚なる人格と優れた語学力と巧みな話術とをもつて学生を指導訓育し、学生に親しまれてゐた。

なお、主著は「海上売買と基本貿易実務」で、その他論文多数は論集、学報等に掲載されていた。



北 穂 高 (槍ヶ岳頂上に於て撮影 大滝山より19キロ 上高地より22キロ)

北アルプスに残雪を探る

松 本 俊
管 籍 課 長

赤外プロニー
七月十六日

午後五時発の列車にて午
前二時木曾福島に着、バス
にて午前五時上高地到着。

七月十七日

予ねて、安曇村役場に依
頼したガイドの事務所に行
き、経験十五年のベテラン
川上嘉吉氏に会い、四日間
の行程の打合を済ませ、午
前七時一路本日宿泊所の大

山々を庄して特異な姿を見せて居る。明
日はそこまで行き反対にこの場所を遠望
するのである。我れ等の一步一步は万重

の岩岩をも貫ぬく元気一杯、記念撮影を
終えて夕食を取り寝床に入る。
七月十八日
午前六時出発全員充分な装備をする。
本日が一番撮影にとつて大切な日であり
且又槍ヶ岳まで十九キロの行程である。
はや大滝山より見る北ア連峰は朝日に照
らされ残雪の雪渓は神秘そのものであ
る。涙さえにじむのである。靈感と云う
か、はやる心をおさえ、午前八時海拔二
千六〇〇米、蝶ヶ岳につき、手に取る如く
眼前に現われたる北ア連峰
の撮影をした。

この節アルプスを登る人が多くなり一
部ではブームとかわれられて居りますが、
我々の様に写真を撮るのを目的として多
数が登ることはあまり多くないと思いま
す。我等写友会有志六名は充分なる準備
を重ねて撮影結果の普通悪い三千米級の
山にレンズを向ける事に決しました。
参考までに私の使用フィルムを御紹介
します。

サクラ天然色、35ミリ、富士35ミリF
富士35ミリS、富士35ミリSS、サクラ

滝山に向つた。早や樹上に聳ゆる明神ヶ
岳並前穂高は今年は残雪が多く一行を喜
こばせました。徳沢園に午前十時着、休
憩後右に折れていよいよ密林地帯に入つ
た。丁度持参の中食を了した頃は益々前
穂高がクローズアップされ、天気も良く
雲の形状も良し、前面の樹海を庄して見
るも雄壮の極である。撮影も終つて午後
三時半大滝山々荘に着、高原の如き山で
一面花盛り、木々の葉は今が新緑であ
る。遠く北方には穂高連峰が夕陽に輝き



槍ヶ岳 (槍ヶ岳) の雪渓 (大滝山より16キロ 上高地より19キロ)

午前九時横尾に向い四キ
ロの急阪を下つた。いつし
か溪流の音に喉の渴きを知
る。下れど下れど音のみに
て、ようよう午前十時溪流
に出た。山の上の宿にて水
が無い為め、顔も口も洗つ
て居らず、ここで何にもか
も終らせ横尾の小屋に入
る。昨年の本日は雨の為め
濁沢より小生と美崎君下山
しこゝで一泊した。其の節
持参のラジオで大阪地方の
豪雨(四〇〇ミリ)を知り急
いで帰学した思い出の小屋
である。梓川に沿い山小屋
としては徳沢園に次ぐもの
である。



槍ヶ岳雪渓を行く (大滝山より16キロ 上高地より19キロ)

乾パンを喰べて中食を槍沢と定め十時半出発。午後一時槍沢着。槍沢の冷水にて体を拭き、水筒に詰めて、いよいよ槍ヶ岳の雪渓に入る。ここでも相当撮影が出来た。槍ヶ岳の頂上に近づくとつれて雪が多くなつて来た。いよいよ殺生の小屋、つづいて肩の小屋が見え出した。もう一息である。時に午後四時記念撮影もし、いよいよ肩の小屋に向い午後五時半到着した。ここは無電連絡にて公衆電話がある。電話しているのを聞くと三

千米の山上を忘れる。流れて入る風は冬着のスイーターを透して肌寒く感じ、いかに別世界の思いがする。
七月十九日
いよいよ北穂高縦走である大嶮、中岳、南岳、キレットである。天気は悪い方に向い、一面雲が重なり、難所のキレットを急がす午前八時に肩の小屋を発ち、十時に南岳に着き、休憩をしてキレット越の装備をする。十二時大体キレットを越し中食をとる。これより大渓谷の大キレット越である。手袋はさけ生命を賭しての登行である。午後一時半、全キレットを無事越す。これより北穂高への垂直に近い登りである。岩を縫い縫い午後三時北穂の小屋に到着した。水筒の水は無く一人前三十円の茶にて喉をうるはず。これより北穂を下り、午後六時濁沢小屋に到着。全員無事なるも疲労は大きく一同小屋に入る。この小屋は誠に粗末で私等が今迄泊つた小屋の内一番粗末で其の上満員である。丁度土曜日である関係上東京の客が多く、私等の内三名は川上氏の計らいで別室と聞くこの小屋の事を知つて

いる私は他に室が無いのに別室とは思つて居たら夜具室である。
塵は木の棧に積り有難迷惑である。板壁の間隙より嵐の風は遺憾なしに入り、寒さの為目が覚めて、明日の下山が心配になる。満員のアルピニストは女子も男子も蒲団の巻である。私のような五十才に近い者は一人も居らず皆若人である。何を置いてあつても紛失はしないし、喧嘩も起らない。年長者の言う事、経験者の云う事はそのまま実行に移す、こゝは平和の国である。妻は男女共も荒姿の山の人であるが、皆な助け合つてここまで来たのである。私は充分の注意を怠らず無事に帰る事を天に祈つた。責任は重大であつたが、皆さんから受けた温味は終生忘れる事が出来ない。
ほんとうによかつた二十日は雨風の中を下山北アよ左様なら二十日午後五時二十六分松本発二十一日午前五時大阪着全員即日出勤す。
唯々二十日の私等の嵐の下山の節、三俣運華に於て阪大の若い魂を無くした事は、共に其の日其の地区に在りし者として喪悼の意をさゝげます。



槍沢 (槍ヶ岳) に立つ (大滝山より18キロ 上高地より21キロ)

表紙写真説明

場所 中部山岳国立公園(通称北アルプス)

槍ヶ岳 (海拔三、一七九米) 蝶ヶ岳

(海拔二、六〇〇米) に於て撮影

カメラ ローライフレックス 3.5C

フィルム サクラ赤外プロニー

フィルター R 1

絞及シャッター F8 1/30秒

日時 昭和三十三年七月十八日午前八

時 晴天

撮影者 松本 俊氏

私立大学理科特別助成補助金取扱要領

(昭和三十三年六月十八日)
文部大臣 決裁

一、補助の目的

この補助金は、わが国の私立大学の現状にかんがみ、私立大学の理科系学部、学科の質的、量的な充実発展を図るため、学生の実験実習設備を充実するに必要な経費の一部を補助して、理科系学部、学科の教育を振興し、もつてわが国の科学技術および産業経済の発展に寄与することを目的とする。

二、補助対象となる学部、学科

(A) 一般理科系学部

次の系列の一般理科系学部及びこれらの学部に関連する学部(その一部を内容とする学科を含む)

- 理学部
 - 工学部
 - 医学部
 - 歯学部
 - 薬学部
 - 農学部
 - 獣医学部
 - (B) 新設理工系学部
- 文科系学部の転換またはその他の新増設により新設された次の系列の理工系学部(その一部を内容とする学科を含む)。
- 理学部
 - 工学部

この場合において、新設学部学科とは原則として当該学部、学科の設置された年度より完成年度に至るまでの期間(四年間)とする。

三、補助対象となる設備

理科系の学生の実験、実習用設備で次に掲げるものとする。

- (1) 機械・器具(附帯施設を含む)。
- (2) 校具(理科系において使用されるものとする)。
- (3) 図書(主として学生の使用するものとする)。

四、補助率

- (1) 二の(A)に該当するものについては二分の一とする。
 - (2) 二の(B)に該当するものについても二分の一とする。ただし、次に掲げるものについては三分の二とすることができる。
- (a) 理学系学部、学科にあつては物理学科、化学科。
工学系学部学科にあつては比較的设备を要しない学科(たとえば工業経営科、工業意匠科等)以外のもの。
- (b) 設備は機械器具

(9頁より)

なお同氏はこの機に欧州諸国の司法制度と活動状況の具体的実情を調査する予定。

広報部、矢口・山崎両教授と座談会開催

広報部では七月二十三日(水)午後四時から「南地荘」に木学教授矢口孝次郎、同山崎紀男両氏を招き、在外研究視察制度の現状、成果とあわせて、過般参加のマツケンゼイ講義の模様等を聞くため座談会を開催、校友会からは長柄副会長、林広報部長が出席した。

短大同窓会総会

関西大学短期大学部では七月二十七日(日)午前十時から天六学舎講堂で二百名にのぼる会員の出席を得て総会を開催。当日は会員が遠近各地から参集、大谷氏が司会して盛大に開会、まず開会の辞を副会長長木村吾郎氏が述べたあと会長大森俊次氏が挨拶し、ここで西尾氏を議長に議事に入った。

議事は横山氏の会務報告、湯浅氏の三十二年度収支決算報告、横山氏の次期事業予定説明があり、その後次期予算案が上提承認され、新役員の選出を行った。その結果会長には大森俊次氏を再び推すことに満場一致で決定。評議員、理事、監事を別掲の通り選出した。最後に来賓

を代表して恩師佐伯三郎氏、校友会副会長長柄金吾氏がそれぞれ祝辞をのべて懇親会に入り、同窓、恩師と親しく歓談、午後三時、畑末氏の閉会の辞で散会した

当日決定役員
会長 大森俊次
副会長 木村吾郎 畑末政良 大谷調将
理事 伊藤喜代広 小田雅亮 吉田利秀
西尾高行 横山茂昭 中村義一 中沢義住
菅三郎 有光史郎 石坂俊文 横関香 湯浅昌治
植田博明 小寺憲夫 足代芳明 浅田喜重郎 襲城
寛 古本博文 中地剛 峠田弘 向井英喜夫 中谷
登 塚清種 植渡勝男 橋本善治 北田清士 白須
賀康弘

故藤原真一郎氏本学へ寄附

昭和十年大経卒藤原真一郎氏は去る五月二十二日逝去されたが、生前、本学七十周年記念拡充寄附金募集の折寄附保険契約があり逝去にともない手続が完了、このほど金一万円也を本学に寄附された

学会だより

コロンビア大学

ゲルホーン教授講演

関西大学法学会では、目下東京大学アメリカ研究センター講師として来日中のコロンビア大学法学教授ワルター・ゲルホーン博士(Dr. Walter Gellhorn)を招聘して、五月十一日午後一時から法文学舎講堂で講演会を催した。

演題「言論の自由」



校 友 バ ッ チ

校 友

校友会本部の動き

七 月

今月はまず本年度第一回代議員会が開催された。その他校友会との懇談会が二度にわたって開かれ、支部では南支部、短大同窓会等が総会を開き、大学側、校友会本部からもそれぞれ役員が出席した。

三日 校友会主催門上組織部長外遊歡送会・午後六時、清交社

三日 組織部会・午後八時、老松

五日 代議員会・午後二時、千里山学舎

七日・二十六日 対校友会懇談会・清交社

十二日 南支部総会・午後六時、大阪観光ホテル・大月会長、榎本、長柄副会長出席

十五日 広報部、新聞「関大」三十八号(七月号)発行

二十三日 広報部・矢口、山崎両教授と座談会・午後四時、南地荘

二十三日 広報部会・午後五時半、南地荘

二十七日 短大同窓会総会・午前十時、天六学舎・長柄副会長出席

組織部会

組織部では七月三日(土)午後八時から「老松」で部会を開催、門上部長外遊中の部長代理の件等当面問題を検討、その結果留守中の部長代理に金本副部長を決定した。

代議員会

校友会では七月五日(土)午後二時から千里山第三学舎講堂で代議員会を開催した。

当日はむし暑い日であったが、代議員一〇〇余名が出席、坂本総務副部長の司会で始められ、榎本副会長の開会の辞、大月会長の挨拶につづいて来賓として出席の久井専務理事、阿部評議員会議長、矢野常務監事からそれぞれ挨拶があつた。

ここで議事に入り、最初各部長から会務報告があり、続いて西村財務部長から昭和三十三年度収支決算、三十三年度予算、および三十三年五月末現在会計報告のべられ、次いで監事鎌田嘉之氏から三十二年度収支決算の監査報告があり、一応議事を終了、質疑応答に入った。質疑の主なものは代議員会運営に対する希望、就職対策の強力な推進を望む声等が多かつた。第二学舎で懇親会を開催、最後に万歳三唱して散会した。

南支部総会

南支部では七月十二日(土)午後六時から大阪市南区大阪観光ホテル五階ホールで本年度総会を開催。

坂本相談役が司会、滝口副支部長の開会の辞、田中支部長の挨拶につづいて来賓として出席の久井専務理事、榎本、長柄両副会長らがそれぞれ挨拶や報告後議事に入った。最初千巖幹事長の会務報告、畑下副幹事長の会計報告、芝田副幹事長の事業計画、いずれもユーモアを混え朗らかに報告、鎌田副会長の閉会の辞で終了、ただちに懇親会に移った。

ビールで乾杯のあと方々で歓談、かくし芸の披露もあつて盛會裡に閉会した。

当日出席者

来賓 久井専務理事 榎本、長柄副会長
 委員 田中藤作 鎌田嘉之 滝口武雄 土原明 大野覚 桂本三平 木戸豊 児玉立 坂本道夫 佐伯崇邦 作田稔 浜田喜一 畑下辰典 保井剛一 三木正之 森倉三 芝田幹二 鈴木庄太郎 祖父江鶴郎 高橋富士雄 谷口光俊 千巖寛郎 齋田武 山村富雄 山村睦夫 柳瀬宏 西家一夫 奥田義人 山本益也

富山支部総会

富山支部では七月十三日(日)午後二時から高岡市定塚町「古荘園」で県人会との懇親をかねて総会を開催。

当日は児玉支部長以下会員二十三名、県人会学生六名をあわせて二十九名が出席、珍しく盛な総会となつた。会は一同なごやかに議事を進行、新役員の決定等

を行い、そのあと懇親会を開き、先輩、在學生が膝をつき合せて歓談、時のたつのも忘れるほど楽しい一夕を送つた。最後に、より盛な再会を約し、学歌を斉唱、万歳三唱して散会した。

当日決定役員

支部長 児玉信治郎
 副支部長 宮本五郎
 顧問 古屋東 栗山基一 中島正文
 幹事長 安田倫蔵
 幹事 井田宗明 橋詰兼義 矢内原和一 富田一良 延谷謙三 奥井保 福田作造 釣谷巖 関藤久男 小森実 佐野英司

門上組織部長渡航

校友会組織部長門上敏夫氏は七月十四日(月)東京発空路ストックホルムへ向い七月十六日から二十二日まで同地で開かれる「軍縮と国際協力のための世界大会」に日本代表団の一員として参加した。

武田蔵之助氏西独へ

関西大学顧問武田蔵之助氏は七月十六日(水)空路羽田発西独ケルンに向つた。同氏は七月二十一日から二十六日まで西独ケルン市で開催される第七回法律専門家国際会議(国際法曹協会会議)に日本弁護士会代表者の一員として出席されるもの。

この会は世界各国の約五百名にのぼる法律家で組織されている最も有力かつ權威ある組織である。オスロイでの才六回に続いて開かれる今回の議題の主なものは、①不法行為の責任の国際的問題及び原子力操作より生ずる経済的保障問題、②独占会社及び限定的商業的手段問題その他となつてゐる。

關西大學教授 壺井義正編
關西大學東西學術研究所員

關西大學泊園文庫藏書書目

第二編

A5判 二八〇頁
布クロース上製

大阪の庶民学苑を築いた藤沢東暎、南岳、黄鶴、黄坡先生と三世四代相繼がれた泊園書院の藏書を黄坡元本学名譽教授故藤沢章二郎先生が長年の縁を以て本学に寄贈せられたが、本書はその貴重な藏書書目の第二編である。

なお、第一編は目下印刷過程中である。

目次

卷一 經部	第一 諸經類	第二 易類	第三 書類	第四 詩類	第五 禮類	第六 春秋類	第七 四書類	第八 孝經類	第九 諸經總義類	第十 小学類
卷二 史部	第一 正史類	第二 諸史類	第三 載記類	第四 詔令奏議類	第五 伝記類	第六 地理類	第七 職官政書類	第八 書目金石類	第九 史鈔史評史料類	第十 圖表地圖類
才三 子部	第一 諸子合刻 子類叢刻類	第二 諸子類	第三 芸術類	第四 類書類	第五 勸善書類	才四 集部	第一 楚辭類	第二 別集類	第三 總集類	第四 尺牘類
	第五 詩文評詩文話類	第六 詩曲小説類								

刊行 關西大學出版部
刊行取扱 關西大學出版部

昭和二十六年十月十五日第三種郵便物認可
昭和三十三年八月三十日発行(毎月一回三十日発行)

關西大學學報 第三二八号

八月号

編集兼 久井忠雄 発行人

発行所

關西大學出版部

印刷所
株式会社 ナニワ印刷所

關西大學法制史学会
關西大學經濟學會經濟史研究室 共編

大阪周辺の村落史料

第四輯 五人組帳

(予定) 一八〇頁
フランス綴函入 四〇〇円

目下印刷中(予約注文承ります)

五人組帳の研究は既に多く試みられているが、同じ地方のものをまとめ、同じ地方にあつても年代によつて異なることの研究にまで及んでいない。収録のものは大阪周辺の五人組帳のみをまとめた特色あるものとした。

第一輯 庄屋留書 既刊

第二輯 耕肥、拜借銀、頼母子 既刊

第三輯 證文集、村役人 既刊

刊行 關西大學出版部
刊行取扱 關西大學出版部

關西大學出版部

なお、既刊各輯は貴重稀覯文献の活字版として各方面の注目を受け、古書市販価格が頒布価格の約二倍となつている現状です。ために在庫数も残り少なくなつていきますから御入用の方は直接当部へ御注文下さい。

電話 關西(35)二〇七二番
電話 大阪(26)七二七番

電話(35)七二七一